

# DC, EC, ないしは LC の東漸と、漢籍分類法をめぐる確執

児玉孝乃 山内弘江 松見弘道

(司書・司書教諭課程・図書館学)

## は し が き

殷墟から発掘された亀甲獣骨文字にはじまる書きものは、やがて簡策、版牘<sup>はんぼく</sup>、縑帛<sup>しんぱく</sup>のごときかたちで伝わって、いまや古籍の始祖としての使命をはたしてきたが、中国文献史のうえからみても、きわめて重要な時代を形成していることは、いなめないであろう。

かくして4千余年前の書契のころから、もとより素朴な様式で発生した書きものを収容し、保管をするという整備政策が、公私にわたって勃興<sup>ぼくけい</sup>してきて、ここに当時の王室文庫、いわゆる帝室図書館、ひいては私家の蔵書樓の維持、管理問題が台頭してくるようになった。

そこで一般に、むかじから文献の整理業務の根幹をなす大黒柱といえ、分類法と目録法であることは、これまた洋の東西、電算機時代のいかに問わず、その原則は変わらないであろう。すなわち、理想的にして正鵠<sup>せいこく</sup>な分類と目録が成就されていてこそ、はじめて適切な排架もでき、また迅速に情報源を提供することが可能になるといってもよからう。

ところが有史よりこのかた、歴代皇帝の勅命によって繰り返されてきた文献の収集事業に伴って、必然的に起こったのが、上記の2大基幹整備作業である。しかもこの両者はおのおの、ひたすら混迷と確執にあえぎながら、延延<sup>えんえん</sup>こんにちまで続いていることになる。

よって筆者のひとり、さきごろ中国、とりわけ昨今の台湾において興起している目録法上の一大論争、つまり標目 (heading) を決定するに当たっての、主記入 (main entry) に関する両極をめぐる課題について論評した<sup>1)</sup>ことがある。

すなわち、中国古代からの伝統である書名主

記入論を堅持する喬衍瑄<sup>ぎょうえんげん</sup> (国立中央図書館特蔵組主任) に対して、著者主記入論を展開している藍乾章<sup>らんけんしょう</sup> (国立台湾大学図書館学系教授) との2大巨匠を中心に、激論が続けられてきた。ついでには、いかにも博引旁証、比喩絶妙であるが、いずれが是なりや、軍配のゆくては、いかんとも上げ難い経過を指摘した。

しかしこの問題は、わが国ではずいぶんまえから、標目と記述 (descriptive cataloging) の独立論として話題を呼んできたが、すでに終幕が下ろされたともいえる。ところが台湾、ひいては韓国では、いまなお沸騰しているおもむきが、聞こえてくる<sup>2)</sup>。

われわれはここで、さらに一方の柱である、中国における図書分類史の土俵上で取り組まれてきた、欧米法の受容をめぐる、波瀾万丈の悲喜劇の足跡を、簡潔をむねとしつつ、時代を追いながら、激しかった起伏の多い歷程を回顧してみた。

## I. 伝統的分類法の主流

まず中国において、そもそも書きものが誕生したいきさつについては、すでに触れてきたところである。さらに春秋時代以降、秦代を経た、いわば王侯貴族階級の学術研究の府であり、公文書館であり、帝室の蔵書樓であった官府や、周府に所蔵されていた典籍類は、いかに分類され、目録が作られていたであろうかという、じつに悠久にわたる国立図書館の濫觴期のもよう、ならびに古代から漢代におよぶ、書籍の分類目録ともいべき劉歆の『七略』のことについても、かねて述べてきた<sup>3)</sup>。

このような経緯をふまえて、いまから、長久にして深遠な中国図書分類史を貫通している主

流は、“七分法”と“四部法”との、両軌道であることを強調して、まずその起源から筆を興すことにしよう。その間には、緩急の差こそあれ、流伝しているあいだに展開されてきたさまざまな貢献、ときには葛藤<sup>23</sup>の象徴ともいべき各種の代表的な分類法を、でき得るかぎり一表に集約しながら解説を試みたので、ご教示をたまわりたい。

### 1. “七分法”の起源と、その系譜

漢の武帝をはじめ、昭帝の死後、27日めに、弱冠18才にして帝位を継承した宣帝を経て、人情皇帝の誇れ高い元帝、およびその子の成帝にいたる、およそ1世紀あまりの間は、まさに前漢200年の歴史においても、もっとも文化の薫り高い平和の、み代であったといえる。

短命な昭帝のあとを継いだ青年皇帝であった宣帝の親政時代には、青史に残る対外政策を発揮されたことはさておいて、内政的にも、法術官僚を重用したころは、いまだ儒教は、国家の政治理念として、絶対的な地位を確保するにいたらなかった。ところがほどなく、塩鉄会議において沸騰した論議を無視することができず、しだいに官僚層に浸透してきた儒家思想を背景に、一步一步、儒教を行政的理念としてゆく路線が敷かれるようになった。『漢書・宣帝紀第八』の末尾、甘露3(51 B.C.)年の条に

詔諸儒講五經同異、太傅蕭望之等乎奏其議。上親稱制臨決焉。廼立梁丘易大小夏侯尚書穀梁春秋博士、冬烏孫公主來歸。

以上の記事が掲げられている。いわゆる後世までひびく石渠閣文庫が所蔵する、古典の大校訂作業が召集された記録である<sup>4)</sup>ことがわかる。

したがって後述するように、その後の成帝、哀帝の校讎<sup>5)</sup>事業や、白虎觀會議を引き起こす導火線ともなった、図書館行政への貢献ぶりには、見上げるものがある。

黄龍元(49 B.C.)年12月、宣帝の逝去に伴って、許皇后が産んだ皇太子奭<sup>6)</sup>が即位した。元帝(48-33 B.C.)である。

その子成帝(32-7 B.C.)は、『漢書・成帝紀第十』でもみられるように、皇太子時代から

まことに酒色を好み、その生活態度は情欲に耽溺<sup>7)</sup>し、放逸な生涯を送ったことで知られる。ところが一方では、成帝はまた儒学の興隆に情熱を燃やし、古籍の整備作業に尽くした功績には、きらり光るものがある。

すなわち上述したように、儒家思想が尊重されてきた時代的背景のもと、武帝の収書事業に続く古典の搜集と、その校讎<sup>8)</sup>、整備作業に国力を動員して、2千年後のいまに残る偉業をなし遂げたことは、忽諸に付せられない美筆といふべきであろう。

このひのき舞台に登場してくる重要人物は、まず当世に抜きん出る碩学であった劉向<sup>9)</sup>、劉歆<sup>10)</sup>父子である。

その生家は、高祖劉邦の末弟であった楚王交<sup>11)</sup>の末裔<sup>12)</sup>であって、名門の誉れ高い宗室の生まれなるゆえ、劉向(81?-6 B.C.)の、かみ皇帝に対する発言力と行動には、千金の重みを備えていた。

かような動機から、帝室の政策として、宮廷文庫の一大整備事業が、まさしく皇帝の顧問官である光祿大夫の劉向を委員長として着手されたのは、成帝の河平3(26 B.C.)年のことであった。その経緯や成果については、『漢書』、『後漢書』や、近くは先輩の論述も多く、筆者らも拙論している<sup>5)</sup>ので、ここでは本稿との、かわりあいのあることのみ述べたい。

劉向はまず、賓客接待官ともいべき謁者の陳農を国郡に派遣して採訪させ、収集した古典籍の校讎、すなわち異本の校定作業をはじめた。なにしろ当時にとっては、紙が流行し、印刷術が開発される以前の、簡策や木札等に書写した書きものであるから、誤字、脱字、顛倒等<sup>6)</sup>、底本を定めるところから取り掛からねばならなかった。

かくして校勘をすませた634部、13,397篇におよぶ、当時としては膨大な文献をば、その子である劉歆をはじめ、任宏<sup>13)</sup>、尹咸<sup>14)</sup>、李柱国ら、それぞれ専門別に分担させ、書誌的な解説を条書して、一書にまとめたのが『別録』20巻である。世に図書解題の元祖とされている。これこそ上古から前漢時代までの、ときの皇家

図書館ともいえる天禄閣が所蔵していた文化的遺産の総目録といってもよからう。

ただし前後 18 年におよんだといわれるものの、完成をまたずに、72 歳で逝去したため、3 人の遺児のうち、なかでも傑出していた末子の歆 (53 B.C. - A.D. 25) が、父の遺業を受けつ

いで、精進したあげく、さらに群書を総括したうえでその要旨を書き、分類して『七略』(表 [1] 参照) を編集し、やがて哀帝に奏上した。こんにちまで分類総目録の鼻祖として、広く斯界にその名を留めているのも、後述するごとく首肯されるところである。

表 [1] 七分法の系譜

分類法	編者	官職	貫籍・年紀	分類	典拠・摘要
七略 7巻	劉歆 53 BC? ~ AD 23	侍中奉車都尉、父の向とともに、宮中の秘書をとりしめる。向の死後、中壘校尉となり、大司馬の王莽に重んぜられる。のち、侍中大夫にすすむ。	字は子駿、建平元年(6 BC) 名を秀、字を穎叔と改む。彭城(湖北省)の人。漢・宣帝の甘露初年に生れ、更始元年、劉玄に自殺。年70余歳。建平元年前後の編。	①輯略 ②六芸略 ③諸子略 ④詩賦略 ⑤兵書略 ⑥術数略 ⑦方技略 ※ 輯略以外の6大類は、さらに38の小類に細分す。	※ 『前漢書』36、『同』99上、『後漢書』伝1、『同』伝11、『同』伝27、『宋書』61、『隋書』32。 ※ おおよそ、33,090巻を所収。
七志 40巻(南齊書) 30巻(南史本伝)	王儉 452~480	宋の明帝のとき、秘書丞(帝室文庫司書官)となり、齊に入つて尚書左僕射となる。	字は仲宝、南齊の邪臨析(山東省)の人。王僧綽の子。文帝の永嘉29年に生れ、武帝の永明7年に卒す。年38歳。宋の廢帝の元徽元年(473)の編。	①經典志(六經、小学、史記、雜伝) ②諸子志(今古諸子) ③文翰志(詩賦) ④軍書志(兵書) ⑤陰陽志(陰陽及因緯) ⑥術芸志(方伎) ⑦因譜志(地域及因書) ※ 7大類のほか、別に方外之經(道仏の書)を付す。(隋志序)	※ 『南齊書』23、『南史』22。 ※ 『隋志序』には、70巻に作る。また別に、『元徽四部書目録』を作り、15,704巻を収む。 ※ 逸書。
七録 12巻	阮孝緒 479~536	処士 參校官簿史。	字は士宗、尉氏(河南省)の人。齊の高帝の建元元年に生れ、梁の武帝の大同2年に卒す。年58歳。普通4年(523)の編。	①經典録(六經、小学) ②記伝録(史記) ③子兵録(子書、兵書) ④文集録(詩文) ⑤技術録(天文、曆算、刑法、方伎)(以上内篇五録) ⑥仏法録(仏經) ⑦仙道録(仙術、符圖)(以上外篇二録) ※ 記伝録と仏法録が入れてあるところに、時勢が反映している。	※ 『梁書』51、『南史』760 『七略』に基づくもので、『七志』とは異なる。 ※ 逸書であるが、『隋志』や、『弘明集』に残っている。
七林 巻数不明	許善心 558~618	隋の秘書丞。直散騎常侍となり大業元年(605)に、礼部侍郎にすすむ。越王より、左光祿大夫高陽郡公を贈らる。	字は務本、高陽北新城(河北省)の人。家に万余の書あり、神童といわれた。武帝の永定2年に生まれ、恭帝の武徳元年に卒す。年61歳。諡は文節。文帝の開皇17年(597)の編。	秘蔵の図籍、なお多く混乱していたため、阮孝緒の『七録』に準拠して、『七林』を編集し、各々総叙を作つて、篇首に冠す。また部録の下に作者の意を明し、その類例を区分した。	※ 『隋書』58、『北史』83。 ※ 『隋書』本伝に、左記のごとき数行を残すのみで、亡逸している。隋、唐二志にも、著録されず。
和州芸文志	章学誠 1738~1801	進士、国子監典籍(読書)として、和州、亳州永清諸県志を修す。	字は実齋、江省の人。高宗の乾隆3年に生れ、仁宗の嘉慶6年に卒す。年64歳)	①經典類 ②記伝類 ③子兵類 ④文集類 ⑤術技類 ⑥仏法類 ⑦仙道類 ※ 7大類を、さらに44の小類に細分す。	※ 35歳のとき文史通義を、翌年この書を編集す。43歳にして校誰通義を、その他史籍の著作多い。 ※ 『七略』の成法を踏襲。
補後漢書芸文志一卷 攷十卷	曾樸 1872~1935	清の辛卯の挙人民国後、江蘇省議員、財政廳長、政務処長。	字は太樸、のち孟樸と改む。江蘇省常熟の人。穆宗の同治11年に生れ、民国24年に卒す。年64歳。光緒21年(1895)自序本。	①六芸志(易等10種) ②紀伝志(史記等5種) ③子兵志(儒等10種) ④文翰志(詩等3種) ⑤術数志(天文等5種) ⑥方技志(医經等3種) ⑦道仙志(道經等2種) ※ 7大類を、さらにこのように38の小類に細分す。	※ 光緒15年(1889)以来、当代の著作を集めて芸文志を補い、2年にして500余部を得、七志に分類す。 ※ 上海に小説林書社を設け、東亜病夫の筆名にて、小説海花を著す。

さてこの『七略』を、さきの『別録』と比較すると、いわば『別録』の内容を抄録したおもむきがあるところから、“略”と称している。よって『七略』は7巻あるのみ。しかしおしむらくはいずれも、唐代以後は散逸してしまっているが、玉函山房輯佚書か、快閣師石山房叢書のうちに、わずかにその輯本がみられる。その

うえさいわいにして、正史中の芸文志、ないしは経籍志の権輿である『漢志』が、この『七略』に準拠しているところからも、全容が察せられるので、いまなお高く評価されているのは、いうをまたない。

近ごろのことであるが、もと中山大学の館長であった杜定友教授はじめ、白国應、倪曉建

ら諸教授が、異口同音に、“スイス人で、医学・博物学者であったチューリヒ大学のコンラード・ゲスナー〔Conrad Gesner (1516-’65)〕が編集した『Bibliotheca universalis (1548刊)』よりは、1550年ほど早く、現存している世界最古の図書分類法である”<sup>7)</sup>というむねを誇示しているゆえんは、そこにある。

つまるところ、表〔1〕にみられるとおり、『七略』は、以後出現した『七志』、『七録』、『七林』など、“七分法”の先河を演ずるもので、加えて、次項に掲げる“四部法”を開拓した荀勗の『中経新簿』を産みだす淵源をなしているところにも、意義深いものがある。

## 2. “四部分類”の誕生と、その系譜

秦漢帝国約400年も、もはや2世紀の後半にはいると、中国の郷村社会は、しだいに無秩序状態に陥っていった。あたかも184年の春には、数十万にのぼる道教信徒たちが、ひとしく黄色のターバンを巻いて、武装蜂起して反乱を計った。

世にいう黄巾の大反乱によって、統一政権は完全に崩壊してしまった。

しかしながら、やがて明初の歴史小説『三国志演義』<sup>8)</sup>そのままに、群雄豪傑らによる武力闘争を経て、晋の武帝の世ともなると、ようやく国家統一の情勢を享受できるほどに回復していった。

いきおい図書の生産という文化の面からみても、大いなる変動を起こすのであった。ここに兵書や術数、方枝に関するものから転じて、歴史、地誌、ないしは佛書部門へと志向するようになるのと、図書の分類法にも影響して、大はばな手直しをする必要に迫られてきた。まさしく荀勗の『中経新簿』は、このような基盤のうえに編集されたことは、否定できない。

いわば帝室文庫の管理者であった荀勗は、表〔2〕にうかがわれるごとく、じつに歴史的な四部式分類法の創案者として、燦然たる存在であることは、1,700余年を経た現代まで、大なる波紋を投げ掛けていることでも知られる。

表〔2〕 四部分類法の系譜

分類法	編者	貫筆・年紀	分 類				典拠・摘要		
中経簿 14巻	鄭 默 213~281	字は思元、婁子と号す。秘書郎を継ぎ、司徒左長史、中庶子、東都太守に進み、光祿大夫に終る。後漢・獻帝の建安18年に生まれ、晋・武帝の太康2年に卒す。年68歳。魏・明帝の青龍3年(235)の編。	つぎの、中経新簿の母体				※『晋書』44、『隋書』32。 ※秘書中外三閣の書。 ※四部分類法の創始、唐代に散逸。		
中経新簿 14巻	荀 勗 ? ~289	字は公曾、潁陰(河南省)の人、諡は成。中書監から光祿大夫、秘書監となる。生年不詳、晋・武帝の太康10年に卒す。同・武帝の咸寧5年(279)の編。	甲 部 六芸・小学 (共2類)	乙 部 古諸子百家 ・近世子家 ・術数 (共5類)	丙 部 史記・旧事 ・皇覽簿・ 雜事 (共4類)	丁 部 詩賦・図奏 ・汲冢書 (共3類)	※『晋書』39、『隋書』32。 ※『中経』に準拠して編集。 四部分類法の権輿。子は史に先んず。宋にいたりて逸す。※『隋志』では29,945巻を収む。※『旧唐書』では27,945巻を収む。※細素に書写し標囊に包む。		
晋元帝書目	李 充 323 前後	字は弘度、江夏(湖北省)の人。丞相王導の記室參軍となり、大著作郎にすすむ。のち、中書侍郎に累遷す。晋・明帝の太寧元年前後在世。晋・穆帝の永和5年(349)の編。	甲 部 (五 經)	乙 部 (史 記)	丙 部 (諸 子)	丁 部 (詩 賦)	※『晋書』92。※勗の旧簿に基づく。(『七録序』)。※四部305帙、3,014巻の秘閣の書目。※四部の順序を確定す。		
隋書経籍志 4巻	長孫無忌 〔等〕奉勅編 650前後	無忌、字は輔機、洛陽(河南省)の人。吏部尚書、趙国公に封ぜられ、のち太子太師に、高宗の初め、太尉にすすむ。唐・高宗の永徽元年前後在世。顯慶元年(656)の編。	經 部 易〔等〕 (共10種)	史 部 正史〔等〕 (共13種)	子 部 儒〔等〕 (共14種)	集 部 楚辭〔等〕 (共3種)	道経部 (附) 経戒〔等〕 (共4種)	仏経部 (附) 経〔等〕 (共3種)	※『唐書』105、『旧唐書』65。 ※14,466部、89,666巻、濫觴は、荀勗、李充の書目、凡て47種。
古今書録 40巻	馬懷素、元 行冲、母斐 〔等〕編 720前後	懷素、字は惟白、丹徒(江蘇省)の人。戸部侍郎となり、常山県公に封ぜられ、昭文館学士を兼ね。秘書監にて終る。行冲、名は、字をもって行わる。洛陽	甲部経録 易〔等〕	乙部史録 正史〔等〕 (共13種)	丙部子録 儒家〔等〕 (共14種)	丁部集録 辞等〔等〕 (共3類)	※馬懷素：『唐書』199、元行冲：『唐書』200、母斐：『唐書』199。 ※3,060部、51,852巻、凡て42類、		

		の人。通事舎人より、弘文館学士にすすむ。喫、洛陽の人。官右補闕、開元含象亭十八学士の一。玄宗・開元9年(721)の編。					※逸書。
旧唐書経籍志 2巻	劉昫〔等〕 奉勅編 887~946	昫、字は耀遠、また日輝、涿州帰義(河北省)の人。翰林学士、端明殿学士、右僕射となり、東都留守、司空平章事とすすむ。唐・僖宗の光啓3年に生れ、開運3年に卒す。年60歳。開元7年?の編。	甲部経録易類〔等〕 (共12類)	乙部史録正史類〔等〕 (共13類)	丙部子録儒家類〔等〕 (共17類)	丁部集録楚詞類〔等〕 (共3類)	※劉昫:『五代史』55、※『古今書録』が底本であると伝えられる。凡て45類、旧唐書十一志中の一『古今書録』40巻を収む。
崇文総目 60, 62, 64, 66巻と分かる	王堯臣〔等〕 奉勅編 1040前後	堯臣、字は伯庸、応天府(河南省)の人。翰林学士より、枢密副使、参知政事、吏部侍郎にすすむ。生卒年未詳。宋・仁宗の慶暦元年(1041)の編。	経部易類〔等〕 (共9類)	史部正史類〔等〕 (共13類)	子部儒家類〔等〕 (共20類)	集部総集類〔等〕 (共3類)	※宋代の3館(昭文、集賢、史館)および秘閣所蔵の官修目録。※凡て45類、3,445部、30,669巻を収め、8年を要して成る。
新唐書芸文志 4巻	歐陽修〔等〕 奉勅編 1007~1072	陽修、字は永叔、醉翁あるいは六一居士と号す。廬陵(江西省)の人。諡は文忠。翰林学士、枢密副使となり、参知政事にすすむ。宋・真宗の景德4年に生れ、神宗の熙寧5年に卒す。年65歳。陽修、没年の編。	甲部経録易類〔等〕 (共11類)	乙部史録正史類〔等〕 (共13類)	丙部子録儒家類〔等〕 (共17類)	丁部集録楚辭類〔等〕 (共3類)	※旧唐書を増補したもの。分類はほぼ旧志のごときも、多少の異同あり。 ※凡て44類。 ※ときに官名、字、貫籍等を注す。
郡齋讀書志 4巻 後志2巻 考異1巻 付志1巻	晁公武 1144前後	字は止止、鉅野(山東省)の人、沖之の子。四川総領財賦司、臨安府少尹にすすむ。生卒年未詳。南宋・高宗時代在世。高宗の紹興21年(1151)の編。	経部易類〔等〕 (共10類)	史部正史類〔等〕 (共13類)	子部儒家類〔等〕 (共18類)	集部楚辭類〔等〕 (共4類)	※その任地の郡衙が所蔵していた書物について記しているため、その名がある。巻数、編者、その概要を解題す。※凡て45類、他に、昭徳文集60巻等の著あり。
遂初堂書目 1巻	尤袤 1127~1194	字は延之、常州無錫(江蘇省)の人。士策泰輿令より、太常少卿、礼部尚書にすすむ。南宋・高宗の建炎元年に生れ、光宗の紹熙5年に卒す。年67歳。理宗の宝慶元年(1225)の編。	経部経総類〔等〕 (共9類)	史部正史類〔等〕 (共18類)	子部儒家類〔等〕 (共12類)	集部別集類〔等〕 (共5類)	※私人の家蔵目録。各類に書名のみあって、巻数、編者、解題を附せず。経史に、テキストの別を加えている。 ※一名を益齋書目ともいう。 凡て44類。
直齋書録解題 22巻	陳振孫 1240前後	字は伯玉、直齋は号、安吉(浙江省)の人。端平中(1234~36)、浙西提挙となり、嘉興知府を経て、戸部侍郎にすすむ。生卒年未詳。南宋・理宗の淳祐9年(1249)の編。	経部易類〔等〕 (共10類)	史部正史類〔等〕 (共15類)	子部儒家類〔等〕 (共20類)	集部楚辭類〔等〕 (共7類)	※任地の福建は、鄭樵はじめ故家旧籍多し。51,180余巻を得て、郡齋讀書志にならって、解題を作った。今本は、永樂大典から輯出したもの。
文獻通考経籍考 76巻	馬端臨 1300前後	字は貴与、樂平(江西省)の人。元初に柯山書院山長になる。台州儒学教授にすすむ。元・成宗、仁宗、英宗時代在世。英宗の至治2年(1322)の編。	経部易類〔等〕 (共14類)	史部正史類〔等〕 (共14類)	子部儒家類〔等〕 (共21類)	集部賦詩類〔等〕 (共7類)	※郡齋讀書志、直齋書録解題にならって、解題書を作った。編者の履歴、思想、書の内容、得失等を掲ぐ。 ※凡て56類。
宋史芸文志 8巻	脱脱〔等〕 奉勅編 1340前後	字は大用。至元年中、御史大夫に、至正の初年に、中書右丞相にすすむ。宋遼金三史編纂の都総裁となる。また托克托に作る。生卒年未詳。元・順帝時代在世。順帝の至正5年(1345)の編。	経部易類〔等〕 (共10類)	史部正史類〔等〕 (共13類)	子部儒家類〔等〕 (共17類)	集部楚辭類〔等〕 (共4類)	※宋史十五志中の一、首に総序あり、書籍の散亡収集の状況を述ぶ。書名、巻数、編者の姓名を記するのみ。 ※凡て44類。
百川書志 20巻	高儒 1530前後	字は子醇、自ら百川子と号す。書齋は、志道堂と称す。涿州(河北省)の人。生卒年未詳。明の世宗時代在世。嘉靖19年(1540)自序本。	経部易類〔等〕 (共10類)	史部正史類〔等〕 (共21類)	子部儒家類〔等〕 (共30類)	集部秦漢六朝文類〔等〕 (共23類)	※武官有数の蔵書家の、家蔵書目。郡齋讀書志にならって、各書目のあとに、簡略な解題を附す。※凡て90類。
万卷堂書目 4巻	朱睦㮮 1573前後	字は灌甫、明の宗室、東陵居士と称し、また西亭と号す。周定王朱肅六世の孫。鎮國中尉より、周藩宗正、領宗学事にすすむ。生卒年未詳。明の世宗、穆宗、神宗に仕う。神宗・万曆5年(1577)の編。	経部易類〔等〕 (共10類)	史部正史類〔等〕 (共13類)	子部儒家類〔等〕 (共8類)	集部楚辭類〔等〕 (共7類)	※680部、6,120巻におよぶ私家蔵書室の目録。書名、巻数、編者を載す。ただし、明末の乱に散逸す。 ※凡て38類。
澹生堂蔵書目 14巻	祁承㮮 1580前後	字は爾光、越凡と号す。紹興(浙江省)の人。明の万曆甲戌(1574)の進士。1613年、江西参政となる。庚申の整書略例たり。光緒20年徐友蘭抜本。	経部易類〔等〕 (共11類66種)	史部国朝史〔等〕 (共15類66種)	子部儒家類〔等〕 (共13類79種)	集部詔制類〔等〕 (共8類33種)	※私家蔵書目にして、書名、冊数、巻数、編者を記す。各部、各類、いずれもさらに属目あり。 ※凡て47類244種。

国史経籍 史五卷附 録一卷	焦 竑 1541~1620	字は弱侯、澹園と号す。日昭(山東省)の人。万曆17年(1589)の進士。翰林修撰、福寧州同知にすむ。明・世宗の嘉靖20年に生れ、神宗の万曆48年に卒す。年80歳。	経 部 易類〔等〕 (共11類82種)	史 部 正史類〔等〕 (共16類102種)	子 部 儒家類〔等〕 (共18類123種)	集 部 制詔類〔等〕 (共6類23種)	※鄭樵の『通志芸文略』の細目を用い、毎類、存逸の別なく、書名、巻数、編者を記し、各類に後序を掲ぐ。 ※凡て51類、330種。
千頃堂書 目 32卷	黄 虞 稷 1629~1691	字は愈部、栢園と号す。晋興(福建省)の人。康熙18年(1679)に博学鴻儒、明史列伝、芸文志、一統志の編纂官にすむ。明・毅宗の崇禎2年に生れ、清・聖祖の康熙30年に卒す。年63歳。	経 部 易類〔等〕 (共10類)	史 部 国史類〔等〕 (共18類)	子 部 儒家類〔等〕 (共12類)	集 部 別集類〔等〕 (共8類)	※明人の著作を四部各類に分けて著録し、編者、巻数などを記し、ときに編者の略伝を、また成書の次第を掲ぐ。内容の解説におよぶことあり。 ※凡て48類。
好古堂書 目	姚 際 恒 1647~?	字は立方、首源と号す。休寧(安徽省)の人。県の諸生たり。明・永明王の永曆元年の生れ、卒年未詳。康熙乙未(1715)桃之駟字、民国戊辰(1928)柳詒徵跋本。	経 部 経総類〔等〕 (共12類)	史 部 正史類〔等〕 (共15類)	子 部 儒家類〔等〕 (共15類)	集 部 志類〔等〕 (共13類)	※先世以来の家蔵書目。解題はなし。闕書目、好古堂収蔵宋元板書目を附す。※凡て55類。※『清史列伝』68。
明史芸文 志 4卷	張 延 玉 〔等〕奉勅編 1672~1755	延玉、字は衡臣、一の字は硯齋。桐城(安徽省)の人。康熙39年(1700)の進士。軍機大臣、保和殿大学士になる。清・聖祖の康熙11年に生れ、高宗の乾隆20年に卒す。年84歳。乾隆4年(1739)編集完成。	経 部 易類〔等〕 (共10類)	史 部 正史類〔等〕 (共10類)	子 部 儒家類〔等〕 (共12類)	集 部 別集類〔等〕 (共3類)	※『明史』96~99、※多分に焦竑の『国史経籍志』に基づく。首に序あり、編者の名を書名に冠し、ときに、内容、編次を注することあり。※凡て35類。 ※存目。
続文献通 考 250卷	洪 漢〔等〕 奉勅編 1730前後	漢、字は尚佐、一の字は鋪庭、拙修と号し、諡は文恭。歷南河東河道總督のほか、兵部尚書を兼ね、文淵閣大学士にすむ。清・高宗の乾隆12年(1747)の編。	経 部 易類〔等〕 (共15類)	史 部 正史類〔等〕 (共15類)	子 部 儒家類〔等〕 (共17類)	集 部 楚詞類〔等〕 (共6類)	※明の王圻が、宋までの文献通考を編したのに対し、遼金、元、明四朝の文献を集めて、これを作った。清になって、明末まで、五朝の事跡を集めたが、これを欽定続文献通考と称す。
続 通 志 527卷	乾隆帝勅編 1711~1799	清朝第6代の皇帝。姓は愛親覺羅、名は弘曆。世宗(雍正帝)の第4子。在位60年余。内外の治世に努め、文化方面でも博学鴻詞科を設け、四庫全書はじめ膨大な勅撰あり、乾隆32年(1767)の勅編。	経 部 易類〔等〕 (共4類21種)	史 部 正史類〔等〕 (共1類39種)	子 部 儒家類〔等〕 (共6類40種)	集 部 楚詞類〔等〕 (共1類12種)	※九通の一。門目体裁は、鄭樵の『通志』にならう。宋から明までの五朝の事を記載し、兼ねて唐代の紀伝を補う。※凡て12類、112種。
四庫全書 総目提要 200卷	紀昀〔等〕 奉勅編 1724~1805	昀、字は曉風、一の字は春帆、自ら石雲と号す。諡は文達。直隸献県(河北省)の人。侍読学士、協辦大学士にすむ。清・世宗の雍正2年に生れ、仁宗の嘉慶10年に卒す。年82歳。乾隆37年(1772)に完成。解題は諸儒が分担し、昀が統一す。	経 部 易類〔等〕 (共10類)	史 部 正史類〔等〕 (共15類)	子 部 儒家類〔等〕 (共14類)	集 部 楚辭類〔等〕 (共5類)	※四部をさらに著録(四庫に集録した書)、存目(名目だけの書)に分け、各書を解題す。各類は、総論のほか、書名、巻数、編者の略伝に及ぶ。また所提のテキスト、内府蔵本、永樂大典本、通考本等を明記。 ※凡て44類、一部の類は属に細分す。
天禄琳琅 書目十卷 後編二十 卷	彭 元 瑞 〔等〕奉勅編 1731~1803	元瑞、字は輯五、また掌仍。雲楣と号す。南昌(江西省)の人。工部尚書にすむ。清・世宗の雍正9年に生れ、仁宗の嘉慶8年に卒す。年73歳。天禄琳琅殿にて、于敏中はじめ、王際華、梁国治、沈初等勅を奉じて、内府所蔵の宋、元、明の善本によって作った。乾隆40年(1775)の編。	経 部 易類〔等〕 (共10類)	史 部 正史類〔等〕 (共15類)	子 部 儒家類〔等〕 (共4類)	集 部 楚辭類〔等〕 (共5類)	※書名は、殿中の蔵書にたまたまった名称。正編400部、後編663部。毎書に、書名、函数、冊数、内容、考証、印記、闕逸を記す。※長沙王民刊本存。 ※凡て44種、一部はさらに細分す。
読書敏求 記 4卷	钱 謙 曾 1640前後	字は遵王、自ら也是翁と号す。常熟(江蘇省)の人。家は因籍に富み、也是園書目十卷は、その蔵書目。本書は、自らの題跋を集めた書目便覧なり。清・世宗の順治中(1644~1661)の編。	経 部 礼楽類〔等〕 (共7類)	史 部 時令類〔等〕 (共11類)	子 部 雜家類〔等〕 (共22類)	集 部 詩集類〔等〕 (共5類)	※雍正4年(1726)趙孟升序本はじめ、伝本多し。解題でなくして、刊刻、繕写の工拙や、旧蔵を論じたる書。海山仙館叢書所収。※凡て45類。
緯雲樓書 目四卷補 遺一卷	钱 謙 益 1582~1664	字は受之、牧齋と号し、また蒙叟とも号す。常熟(江蘇省)の人。吏部侍郎、礼部尚書になり、礼	経 部 経総類〔等〕 (共15類)	史 部 正史類〔等〕 (共10類)	子 部 子総類〔等〕 (共25類)	集 部 六朝文集類 等	※崇禎6年(1633)に蔵書樓を建てたが、わずか7年にして焼失。その書目なり。粵

		部右侍郎にすすむ。明・神宗の万暦10年に生れ、清・聖祖の康熙3年に卒す。年83歳。何義門下の陳雲雲の注あり、補遺に光緒22年(1896)、葉德輝の序文本あり。				(共20類)	雅堂叢書97、98、觀古堂書目叢刻10所収。板刻、書名、冊数、卷数、郷貫等を記載す。 ※凡て70類。
天一閣書目四卷、補一卷、附一卷、碑目一卷	阮元 1764~1849	字は伯元、芸台と号す。儀徵(江蘇省)の人。礼仁閣大学士より、史館にすすむ。雲貴、両広の総督。清・高宗の乾隆29年に生れ、宣宗の道光29年に卒す。年86歳。仁宗の嘉慶13年(1808)の編。	經部 (共8類)	史部 (共14類)	子部 (共14類)	集部 (共8類)	※阮元が、浙江に在任中、范懋柱に命じて編集させた書目。每書、卷数、刊写の別、解説を記す。4,094種を収む。 ※凡て44種類。

武帝に仕えた荀勗は、光禄大夫から秘書監に進んだとき、中書令の張華に命じて、劉向の『別録』を頼りに蔵書の整備を敢行した。ようやく6年がかりで、三国時代、魏の秘書郎であった鄭默が編集したところの、国家の蔵書目録ともいべき『中経』を下敷きにして、『新簿』を作ることができた。

この目録こそ、図書をば甲、乙、丙、丁の四部に分類した元祖であることは、いうまでもない。表示したごとく、わけても注目されるのは、丙部の一類は、上述したような時代的背景をふまえた新しい傾向の図書を受入れるにふさわしい、新学術に対応したもので、後世の図書分類法におよぼせる影響は、きわめて大である。

と同時に、銘記すべきは、該分類法が定着したことにとってみれば、図書分類記号を表記するようになった最初の形式であったことである。さきに掲げた白国應もまた、“ヨーロッパでもっとも早く字母を分類記号に使ったのは、西方寺院図書分類法(1504年)であるが、これよりさらに1,200年あまりまえに、その構想が産まれていた”ことを強調している<sup>9)</sup>。こんにちにおよんでもなお、さすがにとうなずかれる。

それにつけてもまた、いまにして中国はもちろん、日本はおろか、アメリカまで普及している<sup>10)</sup>四部分類法の次第順序は、別表のように、穆帝のときの著作郎であった李充にいたって確定したことを、裏付けなければならない。

とりもなおさず、70年後輩の李充は、師の荀勗が整理した秘書を再整備したとき、重ねて四部分けしたが、乙、丙の順序を変えて、五経は甲部に、史記は乙部に、諸子は丙部に、詩賦は丁部に大別したが、ようやくここに経、史、

子、集の座が定型化したことになる。

しかし荀勗、李充は、四部の座配を確立したけれども、もとより類名はなかった。甲、乙、丙、丁の四部の定名を、経、史、子、集と命名したのは、約300年も経た唐初の魏徵らが高宗の勅命を奉じて、隋代政府図書館の目録『隋書経籍志』を編集したときであった。

わが国においても平安初期、藤原佐世<sup>まげ</sup>が、1,579部、16,790巻の、当時現存していた漢籍の目録である『日本国現在書目』1巻を作った。この秀逸本は、『隋志』に準拠して分類していることでも、その意義の深さが思い起こされる。

しかし『隋志』には、四部のほかになお佛経と道経の、2部の附録があるので、徹底した四部であるとはいきれない。その後、約400年、北宗の仁宗時代、王堯臣<sup>ちぎん</sup>らの奉勅撰になる『崇文総目』にいたって、さきの2部は、はじめて四部分類体系中の、子部の中へ編入されたのである。

さらに約700年あまりを経て、乾隆帝が、古今の重要な中国書を分類整理させるため、紀昀<sup>きん</sup>らに命じて編集させた決定版こそは、『四庫全書総目提要』の快挙である。まさに官僚規正という政治的意図がのぞいていたにせよ、ここに四部分類法の様式をとりまとめた表〔2〕に掲げたとおり、その後における学術的にも、歴史的にも、標準分類法としての定型的な基礎を構築したもので、万古不易の遺産であるといっても、過言ではない。

ここで前述したように、『漢志』以降おこなわれてきた目録編集事業のうち、鄭鶴聲、鶴春兄弟の、いわゆる“中国典籍の四大結集<sup>じゅうしゅう</sup>”は、つぎのごとく『漢志』が『七略』に拠って

いるほか、他の書目はいずれも四部法に準拠しながら編纂されてきているのに気付く。そのうえ奇しくも、約500年刻みの段階を経て、まさ

しく『四庫全書』にいたって最高潮に達したというべく、そのさまを表示すれば

結集回数	著録名称	包含年紀	上距原始	上距結集	部数	巻数
第1次	漢書芸文志	?至23 A. D.	約2200年		678	14994
第2次	隋書經籍志	?至 617	約2800年	約 594年	6150	50880
第3次	宋史芸文志	?至 1276	約3500年	約 659年	9549	27927
第4次	四庫全書總目	?至 1782	約4000年	約 506年	10585	171558

〔参照〕『中国文献学概要』上海商務印書館 1933年 PP・10-38

以上のようなが、換言すれば、4次にわたっておこなわれた乾隆帝時代のこの時期こそは、いってみれば清の黄金期で、元朝につぐ大帝国の建設が成功して、内政面でも、文化一般が充実した極盛時代であった。

ところで四部分類法といえども、もとより不合理な点が多いとて、あれこれ批判されながらも、1,000年あまりにおよんで、政府図書館の蔵書目録を作成するに際し、準拠する分類法として採用されてきている。そこで表中にみられるように、よしんば変動があっても、類目の増減と、名称の変換がなされたにすぎない、と、公言してもよからう。

ひるがえって『七略』の誕生以来、七分法の精神を継承した分類法が、つぎつぎに出てきたことについては、表〔1〕に通覧されるとおりである。

そのうち清の章学誠が、劉歆の歿後1,700年ほど経ているにかかわらず、『和州芸文志』を編集して、七分法を回復しようとした経過についても、あらためて触れなければならない。

とはいえ、全面的に『七略』を龜鑑としたものではなくして、かれはよくその精神を斟酌しつつ、四部の特色と損益を忖度して分類したものと読みとれる。やはり盧震京も、“章氏の分類法上の見解は、劉向、鄭樵以来の第1人者であって、その影響するところ大である”と絶賛している<sup>11)</sup>。さすがに、いかにも史学理論家らしく、分類法こそは、時代の変遷を根拠にして更改すべき点や、互著、別裁の例を力説

するなど、学術的、理論的分類に近づけようとしている努力のあとがうかがわれる。

なおまた、かれは晩年にいたるや、その名著『校讎通義』を撰述して、まさに当世きっての史学、書誌学者にふさわしき、不滅の金字塔を残している。については、その宗劉篇では、“『七略』の流れは四部となり、篆隸の流れが行楷となったごとく、みな勢いの容れざるところである”と認容して、『七略』を回復する主張を放棄した由来も、忘れられない。

## II. 伝承の成規を打破した分類法

劉歆が起こした『七略』に根源して、約300年後には荀勗によって四部法が創設され、やがて『新簿』へと展開していった。さらにまた約300年後に出た『隋志』にいたると、四部の座が安定の兆候をみせてきたが、そのもようについては、前述したところである。

もとより長短、得失が挙げられるものの、晋以後、歴代にわたる秘閣の蔵書は、幾たびかの校勘を経て、整備作業が進められる際は、『隋志』の制度が採用されている。唐一代をみても、佛典を除くと、完全に四部の世界のとりこになってきたことにおいても、例外ではなかった。

ところが宋代に入ると、今日的に表現すれば、脱伝統の改革派集団が、つぎつぎにのり出してきた。つまり旧来の永制化していた分類法に従わず、革新を目指す書誌学者が続出するようになった。なかんずく表〔3〕にみられるとおり、



明朝の『文淵閣書目』と、『内閣蔵書目録』とを除くと、いずれも一家言を有する碩学たちによるものであるから、自家の蔵書室を整理するに当たって、その書目を作成するばあい、ときには片寄りのある蔵書構成の書楼もあって、しかるべきである。その蔵書目録の分類に、それこそ独自の理論で、七分法や四部法の枠組みから抜け出したことも、いかにもと首肯される。

いまもってその名を残している八分法の鼻祖は李淑であるが、なんとしても改革派の筆頭としては、淑より約100年後に出た鄭樵であることを強調したい。

さきに述べた章学誠が、みずからの史学理論を形成するうえで引き合いに出しているのも約600年前の大先輩である鄭樵であった。すなわち鄭樵は早くもすでに、七分法や四部法に準拠している伝統的観念を振り切って、類目を拡充し、子目を増加して、新たな分類大系を建て、『通志芸文略』を編集していたことが、想起される。

この間の社会的背景を、白国應はまた、次のごとく評している。すなわち

鄭樵が、伝統的な分類体系から脱却し、突破することができたゆえんは、一面ではまた、かれの反封建社会の正統的な學術観と、密接な相関関係にあるからである。べつの一面ではまた、宋代になると、科学的知識が相当発達してきたので、たがいに思想上にも反映するにいたった関係を、如実にもの語っている。

と<sup>12)</sup>。白氏はさらに続いて、鄭樵の図書分類の理論上における貢献を挙げて、図書分類法は必ず、すべからく

- ① 条理を持たすべきである。
  - ② 學術の分類をもって基礎とすべきである。
  - ③ 類例を明らかにすべきである。
  - ④ 同類の図書は、一類に帰入すべきである。
- と<sup>13)</sup>、4項に絞っていましめているが、この貴重な原則は、現今においても遵守すべき条項であるとおもわれる。

ここにみられる白氏の論評は、われわれ日ごろの体験からみても、積極的に肯定しなければならない。

表〔3〕 伝統の成規を打破した分類法

分類法	編者	貫籍・年紀	分類	典拠・摘要
邯鄲書目 10巻 (圖書十志)	李淑 1027前後	字は猷臣、徐州豊県(江蘇省)の人、秘書省校書郎、太常丞になり、龍圖閣学士にすすむ。宋・仁宗時代前後在世。仁宗の皇祐元年(1049)の編。	經・史・子・集の四部分類から、57に至る。その他、芸文志、道書志、書志、通為八目があつて、ここに、四分のほか、八分法を創始した。	※23,186巻の家蔵書目であったが、すでに失伝。 ※晁公部の『郡齋讀書志』に拠る。鄭樵は3巻に作り、焦竑は30巻に作る。
通志芸文略 51巻	鄭樵 1104~1162	字は漁仲、莆田(福建省)の人。自ら溪西逸民と号す。右迪功郎、礼兵部架閣より、樞密院編集官にすすむ。宋・徽宗の崇寧3年に生れ、宗の紹興32年に卒す。年59歳。紹興21年(1151)の編。	經類第1(易以下9家、89種)。礼類第2(周官以下7家、54種)。樂類第3(樂以下1家、11種)。小学類第4(小学以下1家、8種)。史類第5(正史以下13家、91種)。諸子類第6(儒術以下11家、48種)。天文類第7(天文以下3家、15種)。五行類第8(易占以下30家、16種)。芸術類第9(芸術以下1家、17種)。医方類第10(医方以下1家、26種)。類書類第11(類書以下1家、2種)。文類第12(楚辭以下22家、55種)。	※蔵書、数千巻を有し、また諸国の蔵書家を訪ねて、それを読破したといわれる。世に夾溪先生と称さる。『通志』200巻をはじめ、41種の著述あり。 ※凡て12類、100家、432種。
鄭氏書目 7巻	鄭寅 1220前後	字は子敏、莆田(福建省)の人。鄭樵の孫。宋・理宗の端平年間(1234~1236)の編。	樵の『通志芸文略』に見られる12類を合して、經・史・子・芸、方技・文・類の7類に分つ。	※陳振孫編『直齋書録解題』には、『七録』と称す。※逸書。
文淵閣書目 4巻	楊士奇 〔等〕奉勅編 1430前後	士奇、字は寓、字をもって行わる。諡は文貞。泰和(江西省)の人。翰林編修より、兵部尚書を経て、少師に進む。兼ねて華蓋殿大学士たり。明・宣宗、英宗時代在世。英宗の正統6年(1441)の編。	国朝・易・書・詩・春秋・周礼・儀礼・礼記・礼書・樂書・諸経総類・四書・性理・附・經濟・史・史附・史雜・子雜・雜附・文集・詩詞・類書・韻書・姓氏・法帖・書譜・政書・刑書・兵法・算法・陰陽・医書・農法・道書・仏書・古今志(雜附志)・旧志・新志。	※永樂年中(1403~1424)、南京より北京の文淵閣へ移した。明室の蔵書目録。勅撰書が多く、逸書も含む。編者の姓氏は載せず、書名、冊数、完否を記す。『千頃堂書目』には14巻と称す。 ※4巻は、『四庫全書』に拠る。
江東蔵書目	陸深 1477~1544	初の名は榮、字は子淵、儂山と号す。諡は文祐。上海(江蘇省)の人。太常卿より、詹事府詹事にすすむ。明・宗の成化13年に生れ、世宗の嘉靖23年に卒す。年68歳。武宗の正徳3年(1508)の編。	大類は14部門、『文淵閣書目』を模して分類す。	※若くして文をよくし、書に長じた。李邕、趙孟頫にならう。儂山集一百巻はじめ、著書多し。※『明史』286、『明詩綜』28、『明詩紀事』12。

宝文堂書目 3巻	晁 環 1540前後	字は君石、春陵と号す。開州（四川省）の人。明・嘉靖2年（1523）の進士。官、国子監に至る。世宗の時代在世。嘉靖年間（1522～1566）の編。	上巻（御製、諸経総録・易・書・詩経……史、子、文集、詩詞に至る12目）、中巻（類書、子雜、樂府、四六、經濟、卒業の6目）、下巻（韻書、政書、兵書、刑書……仏藏、道藏、法帖に至る15目）。	※晁氏の蔵書目。巻数、編者には触れず、多く書名のみ記す。著録多く、またテキストを注記す。戯曲、小説類、話本をも掲げていて、参考にされる。※存目、凡て34目。
玩易樓蔵書目録 2巻	沈 節 甫 1600前後	字は以安、錦字と号す。烏程（浙江省）の人。明・嘉靖38年（1559）の進士。万曆年中（1573～1620）に工部左侍郎に累進す。生卒年未詳。世宗時代在世。	12分類。小説を廃除して、特に簡略をむねとす。	※購書を愛す。私家蔵書室の目録。『千頃堂書目』によると、湖州沈編。※逸書。
内閣蔵書目録 8巻	張萱、孫能伝、秦焜〔等〕奉勅編 1600前後	主編者は張萱、字は孟奇、九岳と号す。別号は西園。博羅（広東省）の人。万曆年中（1573～1620）、平越知府となる。明・神宗の万曆33年（1605）の編。	巻一は聖製、典制。巻二は經、史、子。巻三は集。第四巻は総集、類書、金石、図経。巻五は樂律、字学、理学、奏疏。巻六は伝記、技芸。巻七は志乘。巻八は雜。	※上記の陸深、沈節甫の例にならった明室の蔵書、官書であるが、私家の体裁にならう。編者闕逸、巻数、編纂を記するも繁簡一定せず。※明末に散逸。※凡て18類。
世善堂蔵書目録 2巻	陳 第 1541～1617	字は季立、一齋と号す。連江（福建省）の人。万曆年中（1573～1620）の武臣。諸生出身、官薊鎮の激撃にすむ。明・世宗の嘉靖20年に生れ、神宗の万曆45に卒す。年77歳。万曆44年（1616）の編。	經部、四書部、子部、史部、集部、各家部の6部に大別。各類はさらに、子部は諸子、輔道諸儒書、各家伝世名書に3別して、儒書および古今主要の子書に止め、各家部を農圃、天文、時令、歴家、五行、卜筮、堪輿等、計63類に細分す。	※万余巻の、陳第の家蔵書の目録。各書は書名、巻数を記し、編者を注記す。※乾隆初年に散逸するも、知不足齋叢書に刊入す。※乾隆60年鮑廷博跋本。叢書集成本。
述古堂蔵書目四巻 述古堂宋板書目一巻	錢 曾 1640前後	字は遵王、自らは翁と号す。常熟（江蘇省）の人。家図籍に富み、その蔵書目が、『也是園書目十巻』なり。本書は、清・宣帝の道光30年（1850）自序本。	巻一（経より史に及ぶ、25類）、巻二（子より類書に及ぶ、9類）、巻三（小説家より地誌に及ぶ、21類）、巻四（釈部より書目に及ぶ、23類）。	※『也是園書目』の分類より、さらに精細。編者、書名、巻数、冊数を記す。※粵雅堂叢書第94冊。存目。※凡て78類。
孝慈堂書目 4巻	王 聞 遠 1670前後	字は襲宏、蓮涇と号す。蘇州（江蘇省）の人。生卒年未詳。聖祖時代在世。康熙年間（1662～1722）の編。民国8年（1919）葉啓崧跋本。	凡て85目。極めて繁多、しかも巨細不同にして、ときに異字にして同類、あるいは学は同じくして、類を分つなど、不合理な点あり。	※家蔵書目にして、書名、編者、巻数、冊数、序跋を表記す。ときに旧蔵板本、紙質、余白を録す。※観古堂書目叢刻第14～15。存目。※凡て85類。
米雨樓書目 2巻	周 厚 増 1750前後	字は仲育。婁県（江蘇省）の人。諸生出身。生卒年未詳。清・高宗時代在世。乾隆中（1736～1795）の編。	上巻は經、史、子、集の4類。下巻は総選、および類纂の2類。計6類。門目に分ち、極めて雑乱、無章なり。	※蔵書に富み、高才にして詩を能くす。その家蔵書目。乾隆中、四庫全書館が開かるるや書を數百卷寄進し、佩文韻府をたまわる。※凡て6類。
孫氏祠堂書目内編 四巻外編 三巻	孫 星 衍 1753～1818	字は伯淵、淵如と号す。陽湖（江蘇省）の人。乾隆2年の進士。刑部主事を改め、山東省糧道、權布政使を歴官す。清・高宗の乾隆18年に生れ、仁宗の嘉慶23年に卒す。年66歳。嘉慶初年（1796前後）の編。	每編、歳周の數に従つて、經学、小学、諸子、天文、地理、医律、史学、金石、類書、詞賦、書画、説部の12類。さらに金石、書画、説部の3類以外は、計44の子目に細文す。	※蔵書多く、その家蔵書目。詩文集二十五巻はじめ、著述多し。神明の加護によって書厄を免れるため、祠堂に蔵したといわれる。※每部、書名、巻数、編者のほか、また板本の種類を記す。嘉慶中自序本。存目。※凡て12類44目。
芸風堂蔵書記八巻 續記八巻	繆 荃 孫 1844～1919	字は炎之、一の字は筱珊、芸風と号す。江陰（江蘇省）の人。清・光緒2年（1876）の進士。翰林院編修、京師図書館長たり。宣宗の道光24年に生れ、民国8年に卒す。年76歳。光緒27年（1901）の編。	經学、小学、諸子、地理、史学、金石、類書、詩文、芸術、小説の10大類に分類。さらに諸子史学、類書、詩文は、細分す。	※家蔵の旧籍、金石、書画ことに多く、文集はじめ、著書、刻書も多し。本書は簡単なものは巻数、版本にとどめ、四庫未収の書は編者の略伝、書旨を記す。蔵書の解題。※凡て10類。※民国2年に江陰繆氏刊本。

については、表 [3] に列挙しているごとく、伝統的分類法を突破して編集した分類法をも含めて、もとより中国における封建社会の産物としての分類法は、儒家思想をもって指導原理としている。そこで“六芸部”、あるいは“經”の思想を核として、全類目を貫通する形式をとっていることは、いうまでもない。

つまるところ、古代からのすべての分類法は、

その時代の学術思想と、きわめて緊密な関係にあって、ときの社会的基盤を背景にした知識や学術の発展につれて、敏感に演変してきたありさまが、いみじくも酌みとれるであろう。さらにいえば、現代における書誌分類の原理と、毫も変わるところはない。

### Ⅲ. DC, EC, ないしは LC の東漸と、その接受

#### 1. 欧米勢力の進出と、中国の動揺

中国では、先史時代から、西南アジアやインドの文化と交渉をもち、また有史時代になってからは、中央アジアや西南アジアを經由してヨーロッパへ、また逆に、ローマやギリシャ文化が中国へもたらされてきた。やがて東アジア第1の、多彩な文化国家へと発展していったことは、周知のとおりである。

15世紀になって、ポルトガルのヘンリー航海王により、アフリカ西海岸の探検がおこなわれると、その世紀末には喜望峰を発見している。

1498年には、バスコ・ダ・ガマによって印度航路が開拓され、ゴアを攻略し、ここを根拠地として東進し、マラッカ、ジャバを占領した。

あたかも、ときに進出してきたポルトガルの総督アルブケルケ<sup>14)</sup>は、マラッカこそは東西貿易の接点と認め、ここを東方経路の拠点として、ついで香料の島モルッカ群島を占領し、ついに1517年には、商船の英姿を広東の海上にあらわした。

1549年に、イエズス会宣教師として日本に渡来したこともあるフランシスコ・ザビエルが、中国での布教を目ざして、マカオに向う途中で病没した。その遺志を継承して、多くの宣教師が競って来航してきた。とりわけイタリア人のマテオ・リッチが、1580年に広東に來り、まもなく利瑪竇<sup>15)</sup>という漢名を用いて北京にあらわれ、明代神宗の許可を得て天主堂を建て、伝導をおこなったことも、記憶に新しい。

かれは単に、キリスト教の布教一辺倒ばかりではなくして、中国式儒者の衣服を身にまとい、中国語を学習するうえでも、熱がこもっていた。

一方では、西洋の天文学、数理、地誌学、機械学等を吹聴することもおこたりにく、なかでも『幾何原本』、『乾坤体系』、『測量法義』、『坤輿万国全図』など、中国語訳書を、しきりに出版した。それがため、神宗万曆帝をはじめ、朝野の人士から尊崇を得て、ときの学匠であった徐光啓までもが改宗したことも、話題に残って

いる。

在華30年にして客死した、かれに続く著名な宣教師は、イタリア人の竜華民<sup>16)</sup>や、ドイツ人の湯若望<sup>17)</sup>や、ベルギー人の南懷仁<sup>18)</sup>ら、その数は多い。かれらは、布教活動を容易にするため出版した、西洋の科学や技術を紹介する著書のほか、漢訳書を続々と公刊するにおよんでは、中国図書館界は、さすがに静寂ではすまされなかった。

かかるなりゆきは、17~18世紀へとおよんでも、もとよりとどまることはない。時勢はさらに進んで道光、咸豊の時代(1821-'61)にもなると、通商や伝教のため往来する欧米人や、他方では、中国の図書館人にして、海外へ渡航する人士が目立ってくる<sup>16)</sup>と、洋書の輸入、訳本の出現が、日ましに多くなってきたことは、自然のみちすじである。

つづいて同治元(1862)年には、北京大学の前身ともいえる同文館が設立されて、69年には、アメリカ人宣教師マーティンを校長に任命して、32年の長期にわたって翻訳者の養成を目指した。

さまざまな条件があいまって、外国の著作が目覚ましいばかりに訳出されると、国内における影響は、筆舌に尽くせないほどのものがあった。

一面ではまた、海外から帰国したひとたちによって母国にもたらされた土産は、DCであり、ECやLCであり、ALAやLCのルールであり、カッターの著者記号表<sup>17)</sup>などであった。他面あるいは目録カードや、その他の図書館用品であったことも、容易に合点されるであろう。

そのうえ、かれらが遊学中に培ってきた近代図書館経営の理論と技術とが、中国の土壌へ持ち帰られて、さかんに紹介され、横行するようになったがため、往年にわたる在来からの格式をめぐって、反動的な抵抗が如実にあらわれはじめた。

勢いのおもむくところ、伝統堅持派と、新風推進派との対立は、やがて確執の域まで発展してきたもようについても、すでに述べてきたが、当然の帰結である。

## 2. 旧民主主義革命時代の分類法

1840年6月、英艦隊は広東港外に進出して砲火を交えたが、アヘン戦争の勃発こそは、中国では近代史の序幕であるといっても、ふさわしい場面であろう。これまで長年にわたって孤立して育ってきた伝統の王朝政治、ないしは経済機構までもが、もろくも解体しはじめて、いわゆる半植民地、半封建への社会へと変革していった。

ほどなく旧来の封建的蔵書楼は、有無をいわず近代化された図書館へと、衣装なおしをする必要に迫られてきた。ひとり図書分類法のみを取りあげても、金科玉条のとりこになっていた伝統的分類法内には格納しきれないような、いわば文字面でも、内容的にも、形体面でも、あまりにも多様化した文献があらわれた。つまり多年にわたって蓄積した古籍に加えて、洋書、新書、翻訳書までも、一堂に抱え込まざるを得なくなっている現状に立って、周章狼狽すること、しきりであった。

ときあたかも保守派は、“中国学を体とし、西洋学を用となす”というキャッチフレーズを掲げて、四庫分類法の改革を企図した。

かたや清末屈指の学者であり、大政治家であった康有為、梁啓超、黄遵憲らは、奇しくもそろって来朝したこともある親日派といえる。

かれらは変法維持派の筆頭で、新訳の図書目録を編成するに当たって、四部法に依拠することなく、それこそ時局に呼応して、斬新な分類体系を唱道した。

梁啓超は、その師である康有為が、『日本書目志』を編集して、新しい資産階級の図書分類の理論と方法を提唱したのに対応するとともに、1896年9月、中国で最初に出た旬刊誌『時務報』に、『西学書目表』を発表した。まさに学、政、教の三大類目を掲揚したが、それこそ西欧資本主義国家の分類大系の影響を受けた画期的なもので、従来の分類思想に対して衝撃的な啓蒙作用を起こしたことは、もちろんである。

そうはいうものの、つまるところは、新書や訳書のみならずフットライトを浴びせていて、旧書のそれは避けて通っているところからも、自家

撞着の分類法であるというそしりは免れず、厳しく評価せざるを得ない。

おもうに、おりしも為政者、学識経験者までもが、図書の分類目録改革論にまで警鐘を打ち鳴らした時流であるから、たちまち波紋を呼ぶところとなった。

まずは梁啓超の目録が発表されると、その年、ときの統治者は、時代の要請に即応するため、科挙の制度を廃止し、学制を改革し、学堂を建立して、開放的な蔵書楼、いわゆる近代図書館を設立すべしという令を下した。

1904年に設立された古越蔵書楼では、いち早く新旧図書を一本化して収容できる分類大系を発表した。すなわち、2部到大別している。

学部：易学、書学……小学、文学等 23類

政部：正史、古史……美術、稗史等 25類  
略記すれば以上のようなものである。

つづいて中国人経営によって上海に設立された最初の学校図書館ともいえるべき、南洋中学図書館がある。ここの分類法は、陳乃乾によって、1919年に編集されたもので、いわば、周秦漢古籍はじめ、歴史、政典を経て、詞曲小説、彙刻（叢書）にいたる 14 大類におよぶものであった。

如上に掲げた両者は、いずれも伝統的分類法を打破して、新分類法の大系を創始したものである。でもなるほど、中国図書分類史上では出色のものなりと、大々的に取りあげているむきもあるが、現代的視点からすれば、線香花火的存在であったとしか、いいようがない。さるほどに普及するまでのものではなかった。

ただし、関連して、ここで特筆大書しておかなければならない歴史的事実がある。

すでに述べた<sup>18)</sup>とおり、上海は中国における海の玄関口として、交通の要衝地であるばかりでなく、政治、経済、文化一般にわたって、中国的縮図であることを強調したい。

なにしろ上海開港の 19 世紀中葉には、のちの上海工部図書館が出現して、やがて DC が採用され、1871年に創設された亜州文会図書館でも、1907年には、ボストン学術協会のボルトン博士の推薦によって、DC とカッターの著

者記号表が使用されている。もとより両者は欧米系の図書館であるが、後述するごとく、後世への影響には、はかり知れないほどのものがある。

おりから、欧米風の刺激が強まってくると、DCに関しても、にわかに興味もたれるようになってきて、1909年には、『中国雕版源流考』の著者としても名のある孫毓修<sup>18</sup>が、『東方雑誌』に、“図書館”というタイトルで紹介したことが端緒となって、いちずに普及していったことについては、われわれの語りぐさになっている。

### 3. 新民主主義革命時代の分類法

1919年5月4日、パリ平和会議の結末に激昂した北京大学を中心とする学生、約300人が、政府糾弾の一大デモを起こした。このいわゆる五四運動は、ただちに反軍閥、反帝国主義の政治的国民運動へと発展していった。

一面また、封建的な古い制度や、儒教的な旧政治、旧倫理、旧芸術への反抗を展開する文化運動でもあった。

かくして青年層のみならず、新たに労働者階級も加わった、デモクラシーとサイエンスという新文化運動へ発展し、やがて、社会主義、とりわけマルクス主義を旗識とする民族独立運動へと推進していった。

身近な図書館事業界にとってみても、まずこのようなおり、アメリカ帰りの楊昭愬<sup>19</sup>が、1923年9月に『図書館学』（2巻、上海商務印書館）を発刊した。おりしもその下巻（pp. 355-382）で、アメリカ産としては、デューイのDCをはじめ、カッターのEC、およびLCを、イギリス産としては、ブラウンが編集したSCの大綱を、おのおの翻訳して紹介するとともに、それぞれ優劣の点を論評した。

この著作は、もともと当時においては、欧米的色彩が横溢<sup>20</sup>した、いってみれば図書館運営一般におよぶ、権威ある啓蒙書である。

なんといっても20世紀初頭のことであるから、その反響は予想以上であったことが、うかがわれる。

そのうち、DCの優点として列挙しているのは、①簡単、②柔軟性に富む、③記号が記憶しやすい、④小冊子、書簡、簿記にも適用できる、⑤詳細な索引目録がある、⑥門類の軽重が画一的である、との6項である。

うらはらに、劣点としては、①はなはだ機械的である、②科学的な系統がない、と、すこぶるまを<sup>21</sup>を得た、端的な評価をしている。

当然のこととはいいながら、20数年後に出たJ. ミルズのDC評<sup>19</sup>を下敷きにして見立てると、多くの軌を一にしている点が受けとめられて、とても関心もたれる。

やがてこの紹介記事が発表されると、3年後には、おりから金陵大学出身で、東南大学在勤中の朱家治が、中華図書館協会編集の『図書館学季刊』誌上で、これまた詳細な紹介と批判をおこなった<sup>20</sup>。ことさらに、DCはアメリカ産であるため、China 関係事項は、“administration: 354.51” はじめ16項、Chinese 関係事項は、“architecture: 722.1” はじめ17項のみしか設けられていないため、中国むけには、項目が不足で、ふつごう千万である。そうしたところから、沈祖棻、胡慶生や、杜定友らによって、DCの中国式アレンジ版が、つぎつぎ出たのである、というむねを、ちくいち掘り起こしているが、もとより、われわれも痛感される。

各国の図書館を沸かせたこのDCをば、1929年には、その後台湾へ渡った国立清華大学の蔣復璁<sup>21</sup>が、また1931年には、1908年創立という、ふるき由緒のある山東省立図書館の李玉麟<sup>22</sup>らが、それぞれ紹介した。そのなかで洋書や新書の分類には、とりわけ適用できると評論しているが、それほど時代の寵児<sup>23</sup>であったことが彷彿<sup>24</sup>される。

なるほどまもなく、あい前後して、大連大学、河南大学、齊魯大学をはじめ、ハルピン市を省都とする黒龍江省立図書館等、いくつかの図書館でも、上述の趣旨から歓迎して、採用することにふみ切っている。

DCについて普及した、カッターのECも、1926年6月には、早くもニューヨーク州立図

書館学校を卒業して、東南大学図書館に赴任している洪有豊主任によって、これまた克明な紹介がなされた<sup>23)</sup>。

かくして、簡略ながら DC や EC などが、中

国へ渡来した前後の実情を眺めてきた。したがって、ほどなく表〔4〕に集約したような分類法が、あいついで披露される引き金となった背景まで酌みとれるであろうとおもう。

表〔4〕 新民主主義革命時代の分類法大綱

〔備考〕DCは参考

分類法名称	編者	十大類目(一次区分番号)										摘要	紀年
		000	100	200	300	400	500	600	700	800	900		
Dewey Decimal Classification	Melvil Dewey	総類	哲学	宗教	社会科学	自然科学	応用科学	美術	文学	文学	史地	Dewey (1851~1931)、米國	初版1876
仿杜威書目十類法	沈祖棻、胡慶生	総類及び類書	哲学・宗教	社会・教育	政治・経済	語学	科学	工学	美術	文学及び語言学	歴史	仿：模倣、杜威：デューイ 文華公書林刊	初版1918 改訂1923
図書分類法(初め、世界図書分類法)	杜定友	総類	哲学科学	教育科学	社会科学	芸術	自然科学	応用科学	語文	文学	史地	上海図書館協会編、中国図書館服務社増訂	初版1925 増訂1935
図書分類法	洪有豊	叢	経	史地	哲学・宗教	文学	社会科学	自然科学	応用科学	芸術	—	『図書館組織与管理』第12章所収。商務印書館	1926
中外一貫図書分類法	陳天鴻	通書	宗教・哲学	教育	社会	言語	自然科学	工芸	美術	文学	史地	上海民立中学図書館印本。	1926
清華学校図書館中文書籍目録	査修	経部	哲学	宗教	社会科学	語言	自然科学	応用科学	美術	文学	史地	該図書館刊本。また、清華學報2巻1期：「杜威書目十類補編」所収。	1927
図書分類法	陳子壽	叢	経	史地	哲学・宗教	文学	教育	社会科学	自然科学	応用科学	芸術	中央大学区立蘇州図書館印本	1928
中外圖書統一分類法	王雲五	総類	哲学	宗教	社会科学	語言	自然科学	応用科学	美術	文学	史地	商務印書館	1928
中国圖書分類法	劉国鈞	総部	哲学	宗教	自然科学	応用科学	社会科学	史地(中国)	史地(世界)	文学・語言	美術	金陵大学図書館初版 上海商務印書館増訂版	1929 1936
中国圖書編目法	袁開明	経学	哲学・宗教	史地(中国)	史地(世界)	社会科学	文学・語言	美術	自然科学	農林・工芸	叢書・目録	ハーバード大学中国図書分類法。現在、アメリカの大学図書館で使用	1931
国立清華大学図書館中文書目	施延鏞	—	総類	哲学・宗教	自然科学	応用科学	社会科学	史地	語文	美術	—	該図書館印本	1931
中国圖書十進分類法	何日章	総類	哲学	宗教	社会科学	語言	自然科学	応用科学	美術	文学	史地	北平師範大学図書館印本。	1934
中国圖書十進分類法	皮高品	総類	哲学	宗教	社会科学	語言	自然科学	実業・工芸	美術	文学	歴史	文華図書館学校印本	1934
安徽省立図書館図書分類法	陳天原	総類	哲学	宗教	社会科学	語文	自然科学	応用科学	美術	地理	歴史	安徽省立図書館印本	1935
国立中央大学図書館分類大全	桂質柏	総類	経	史地	哲学・宗教	文学	社会科学	自然科学	応用科学	美術	革命文庫	該図書館印本。べつに『杜威書目十類法』を齊魯大学より、1925年刊	1935
浙江省立図書館図書分類表	金丕遊	総類	哲学	宗教	社会科学	語言	自然科学	応用科学	美術	文学	史地	該図書館編『図書分類』の第3章	1936

このような苦心作を概していえば、デューイの部類名と次序を、つとめて全幅的に尊重しているか、いずれかを変更しているか、2~3の類名を増減しているか、あるいは、経部を先頭に押し立てて、中国的精神を打ち出すことに腐心しているか、といった、いくつかの範疇はんごうに分けようとするむきがみられる<sup>24)</sup>。しかしながら、筆者らにとってみれば、また牽強けんきやう附会ふゑのそしりをまぬがれないようにおもわれない。

このうち、劉、杜の2法、ならびに皮高品と王雲五法が、もっとも多く採用されていたことは事実である<sup>25)</sup>。かつまた解放後も沿用している図書館もあるという通報を、さいきんも得ている。

なかでも王雲五法が出色であるところから、かねて細密に解説した<sup>26)</sup>ことがある。すなわち雲五法は、DCの大系を更改することなく、べつに“+”、“++”、“±”の3種の符号を、DCの分類番号のまえに冠らせて、中国の特色

を出すようにしている。

たとえば

++ 110 中国哲学      110 哲学  
± 327 中国外交      327 外交

のようであるから、中国書をその他一般の図書のまえに並列して、同架、混排することを考えた、奇想天外の妙案であるといえる。

ともあれこの時期は、なんとといっても中国の政治、経済、軍事、科学、文化、社会一般が、空前の変革を来した動転期であった。いやがうえにも新学と旧学、革命と保守、無産階級と資産階級との間に、壮絶な抗争が繰広げられたがために、その波浪はもろに図書館界へも押し寄せ、ひいては図書分類法の分野でも、各種の矛盾と混迷を解決せんものと、戦国時代そのままに、われもわれもと新分類法を生産した。

ウイスコンシン大(米)出身の劉国鈞博士のことばを借りれば、“当時の反動勢力と帝国主義勢力とが相互に結託したがゆえに、図書分類法も、歴史的な局限を受けなければならなくなって、ここに、半封建、反植民地の意識形態の産物があらわれてきた”<sup>27)</sup>のであるが、まさしく1時代を画した百花繚乱<sup>りょうりやう</sup>の世態であったといってもよからう。

#### 4. 解放初期の分類法

久遠<sup>くわん</sup>のむかしから、中国における歴史の車輪は、とどまることなく前進してきたが、1949年10月1日こそは、文字どおり新紀元を画し

た日であることは、いうまでもない。

あたかも、中国共産党と人民政府の領導下にあつて、封建主義、帝国主義、ないしは官僚資本主義を推翻して、社会主義革命と、社会主義建設の新時代へと進入して行って、中国人民が解放されて、現代史を塗り替えた一瞬であった。

図書館事業も現代化の路線へと軌道修正をしなければならなくなって、図書分類法の屋台骨も、騒然と揺れ動き出した。

早くも1950年6月には、政府側でも、中央文化部文物局図書館処では、図書整理上の混乱を防止するための『図書分類法未決定期間の、図書整理のための臨時措置法』を發布するとともに、第1回図書分類法会議を召集した。かくしてここで、眼前に迫逐してきた重大事件を審議することを、まずもって手はじめとして着手した。

ところがここに、新分類法を政府みずからの手で制定するための委員会まで結成しながら、思いなかばで、おひらきとせざるを得なかった。

なぜならば、公共図書館や大学図書館等の機関をはじめ、個人名儀にいたるまで、伝えられるところ<sup>28)</sup>によると、44種もの新分類法を競って出産し、なかには、2版、3版までも改訂版が出るほどのものもあった。

いかにも、群雄割拠そのものの様相を露呈している。表〔5〕にみられる代表的な分類法のみ、まずはごく手みじかに評価してみたい。

表〔5〕 解放初期の分類法大綱

(備考) DC、NDCは参考

分類法名称	基本大類 (1次区分類号)										大類数	簡称	紀年	
	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900				
Dewey Decimal Classification	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	10	DC	1876初版 1979, 19版	
東北図書館 図書分類法	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	東北法	1949 1951改訂	
山東省図書館 図書分類法	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	9	山東法	1950油印 1951刊	
蘇北図書館 図書分類法	000	100	160	200	300	400	500	600	700	800	900	11	蘇北法	1951
工会図書館 図書分類法	00	10	20	30	40	50	60	70	80	90	10	工会法	1955	
Nippon Decimal Classification	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	11	NDC	1920初版 1978新訂 8版	

東北図書館（現在の遼寧図書館）では、1948年5月に開館するまえ、すでに新分類法の編成に着手して、翌年8月には初版を、51年に改訂版を発行した。

いずれも、ほんらい、基本大類の異同はあるが、DCを藍本としていて、その特質を挙げれば

- ① 改訂本では、マルクスレーニン、スターリン、毛主席の著作を特蔵（特殊群）として、総類の最前面に置いた。
- ② 魯迅の著作をも特蔵として、①に続けた。
- ③ 図書の新旧は、あらかじめ区別し、類目もまた改修した。
- ④ 実用、技術面では、層累制の数字記号を用いて簡略化を計り、索引を附与した。

このような苦心の労作にもかかわらず、全般的に、旧類型の殻から脱皮することができなくて、随所に旧習をただよわせる伝統的観念が、垣間みられる。

ところがいち早く出たこともあって、当地方での採用館も多く、分類史のうえでも、節目としてその名を残しているゆえんは、察せられるところである。

『山東法』も、デューイの十進制を打破せんとして9大類にしたものの、体系上において混乱をまぬがれず、これまた当初の企図とはうらはらに、DCの枠組みから、完全に離脱することは不可能であった。

ただし銘記すべきは、新民主主義の立場、観点、方法と、資本主義、封建主義の学術、文化とを、明確に区別しようと試みたことである。

1例を挙げれば

① 300	教育学
310	新民主主義教育
320	社会主義教育
330—340	資本主義教育およびその他
② 430	政治学
431	マルクス・レーニン主義政治学
433	資本階級政治学およびその他
③ 452.22	農村建設
452.221	社会主義および新民主主義国家農村建設
452.222	資本主義各国農村建設
452.2223	弱少数民族、植民地反植民地各国農村建設

このようにその特質がうかがわれる。さらに一面では、“+、-、×、÷”の符号で表示するようにしたが、結果的には実用的でなかったため、近況によっても、山東省以外での採用館は、ほとんどみられなかった。

表[5]以外に、たとえば、北京図書館発表の『中国図書分類法』修訂本や、杜定友の『広東人民図書館分類法』をはじめ、その他、同類のもの公刊をおこなっているが、ここらあたりにも、すさまじかった確執ぶりがうかがわれる。

#### IV. 社会主義建設時代の分類法

ふたたびふり返ってみると、長い歴史と、すぐれた文明に輝く、広大な舞台の上で成就された中国大革命である。おりしも社会主義国家体制の建設こそが、新中国にとっての必須の宿命であった。

このような路線をつつ走るとき、数年も待たずに、まぎれもなく図書館の全分野においても、マルクス・レーニン主義で武装し、大衆とともに、自己批判をする必要に迫られてきた。かかる非常事態が波及してくるのも、もとより自然の勢いであろう。

さしあたって、半世紀あまりにわたり、DCを基盤に構築してきた図書分類史上に、不倶戴天の類型を編成せんものと、この部門でも、革命の嵐が吹きまくってきたことを強調しなければならない。

さながら57年2月、毛沢東主席が最高会議でおこなった演説のなかで、思想、学術上では“百花齊放、百家争鳴”<sup>29)</sup>を打ち出したが、それと軌を一にして、まずさきがけて公刊されたのが、『中国人民大学図書館図書分類法』である。

いってみれば、それこそ資産階級の分類法的資質から脱出して、他方、そのあとにつづく表[6]に掲げたような、新中国にふさわしい分類法の範例を定型化したことになる。つまり、マルクス・レーニン主義と、総合性図書の基本大類を前後に増設し、符号には、アラビア数字



を採用しているのが、ひときわ目だっている。  
 しかしこの分類記号は、とりわけ長すぎてめんどろなため、不評をかってている風潮は、いまもってゆるぎない事実である。それにもかかわ

らず、現在中国で出版されている統一図書記号（書籍コード）に、この番号が採用されている<sup>30)</sup>が、これまた格別に興味深く見受けられる。

表〔6〕 社会主義建設時代の分類法大綱

分類法名称	基本大類（1次区分類号）														大類数	簡称	紀年
	1	2	3	4	5	6	7……11	12	13	14	15	16	17				
中国人民大学図書館図書分類法	マルクス・レーニン主義・毛沢東著作	哲学・弁証唯物主義と歴史唯物主義・付宗教・無神論	社会科学政治	経済・政治経済学と経済政策	国防軍事	国家と法律	(中略)	地理経済地理	自然科学	医薬衛生	工程技術	農芸畜牧水産	総合参考	17	人大法	1953 1761 <sub>6</sub> 版	
浙江図書館図書分類表（草稿）	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)……(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	20	浙江法	1957 草稿	
中小型図書館図書分類表草案	A	B	C	D	E	F	G……P	Q	R	S	T	U-Y	Z	21	中小型表	1957	
中国科学院図書館図書分類法	マルクス・レーニン主義	哲学	社会科学（総論）	歴史・歴史学	経済・経済学	政治・社会生活	(中略)	地質・地理科学	生物科学	医薬衛生	農業科学	技術科学	総合性図書	25	科院法	1958	
武漢大学図書分類法	マルクス・レーニン主義・毛沢東思想	哲学・付無神論・宗教	社会科学総論	経済・政治経済学	政治・社会生活	国家と法律・法律	(中略)	地質・地理科学	生物学	医薬衛生	農業科学	工業と工程	総合性図書	26	武大法	1959	
大型図書館図書分類表草案	マルクス・レーニン主義・毛沢東著作	哲学	社会科学総論	歴史・歴史学	経済・経済学	共産主義運動と組織	(中略)	生物科学	医薬科学	農業科学	工業科術	交通運輸	総合性図書	21	大型法	1959	
中国図書館図書分類法	マルクス・レーニン主義・毛沢東思想	哲学	社会科学総論	政治・法律	軍事	経済	(中略)	農業科学	工業技術	交通運輸	航空・航天	環境科学	総合性図書	22	中図法	1971編 1975刊 1980 2版	

『中小型表』は、かねて詳細に解説した<sup>31)</sup>こともあるが、まずは国家組織の体制で編成して、1957年に、中央文化部社会文化事業管理局から公布した、いうならば、最初の文部省推薦方式ともおもわれる。

蔵書10万冊以下の図書館で適用することを目的としていて、符号は“A1 マルクス・エンゲルスの著作と伝記”、“P133 高等代数”のごとく、ラテン文字と数字を組み合わせた様式の嚆矢ともいえる。また巻末には補助表

（助記表）として、形式区分、世界地理区分、中国地理区分、国際時代区分、中国時代区分、中国各民族区分の6表が附されている。

おもうに2年後に出された『大型法』の、水先案内の役回りを演ずるありさまが読みとれる。

についてはこの『大型法』は、前者同様、中央文化部と教育部の指導のもとで、図書館と図書館学教育機構を結合した、全国的な規模によって案出された、いわばこれまた『中小型表』に続く文部省推薦版であるが、当初の企図にかか

ならず、そのわりに普及せず終ってしまったとみている。

『科院法』は、中国科学院系統の図書館における実状に適合できる目標で、8年の日子を費して完成したものである。そこで社会科学と自然科学に関する大類は、ともに11類と、圧倒的に多くを占めていること、さらには、符号はアラビア数字のみで表示しているのが、とても印象的である。たとえば、“51 数学”、“52 力学”のごとき手軽さゆえに、自然科学系図書館では、重宝がられながら普及してきた。

『武大法』は、武漢大学図書館学部の青年教師と学生が一体となって、各種分類法の優点を吸収して編集したものである。初の名は、『紅旗図書分類法』と称したが、いかにも分類法の編成理論と技法とを、一步前進させたものとしては、高く評価される。

その間、58年の教育革命中、武大では23万冊の整理をおこなった経験を生かし、広く意見も摂取して、符号も、AからZまでの26字母からなる基本大類と、アラビア数字の組み合わせによっている。たとえば、“N 数学類”では、“N1 数学一般著作”から、“N5 高等幾何学”等を経て、“N99 数学史”におよんでいるように。

このところ、むやみにといってもよいほどに、乱立して編成された分類法のなかでも、もとより真っ向から、標準分類法を志向したものも多い。『中国法』も、その代表であるといえる。

そのおもわくはふるく、1959年に中央政府文化部の指導によって、北京図書館を主体に、全国的な規模で、『中小型表』を基盤にして編集をはじめた。ところが66年に草稿ができあがったものの、やがて起こった文化大革命のため、さたやみになっていた。

悪玉らが追放されてまもなく、全国の各省市、自治区の図書館や、大專院校、科研単位等、36単位から派遣された500人に近い専門家を動員して、100回余の審議を経たうえで、予備版を完成し、めでたく正式に出版したのは、1975年のことである。さすが、中国ならではの企画であるといってもよからう。

おもえば17年前、中国全土の期待を集めて、わが国ではとても考えられない、ときの中央政府のきもいりで、図書分類法制定の大事業が発足し、曲折の辛酸をなめたあげくのはてに、発布できた産物である。政府の面子が<sup>めんづ</sup>にかけても普及徹底を計らなければならない立場から、文化部では指令を公布して、希望的観測をかけた権輿がみられる。

このような過程のなかで、1979年3月には長沙市において、修訂工作会議を召集し、委員会を設置して、80年6月に、ようやく総論復分表をはじめ、6件の補助表を備えた、674ページ、26×19cmにおよぶ、第2版を出版することができた。同10月には常州市において第2回の委員会を開いて、“使用上の説明”と、“相関索引”を作成することを決定して、作業を進めている現状である。

しかし前述したように、林彪<sup>りんひょう</sup>の四人組のマルクス主義者から、反革命分子への転落があったりして、混迷のあげく、思想性、科学性、および実践性の3原則をふまえた、全国的統一分類法が、かくして制定されたことは、多年におよぶ宿望であったことは、まちがいない。

ところが、昨夏、創立80周年記念式典がおこなわれた、湖北省図書館の孫式礼館長らの書簡<sup>32)</sup>によると、全国公共図書館の、80.5%が採用しているようであるが、なんといっても総人口10億を越す大国のことである、やはり、まだまだの感がする。

## む す び

これを要するに、悠久の歴史を秘める中国は、文献の国と俗称されるように、書きものが発生した古代より、有為転変、危急存亡の天災、地変、人災という、さまざまな書厄をくぐり抜けながら、尊い文化遺産が、おびただしくこんにちまで伝承されてきたのである。よって、気の遠くなるような、2千年あまりにおよぶ苦難の事態を、時代をたどりながら、一気にその要綱を眺めてきた。

いまひとたびその間を回顧すれば、封建時代

における劉歆の『七略』にはじまる七分法は、やがて四部法へと展開し、中国はもとより、いまなおわが国でも、漢籍を大量に所蔵する図書館や研究所等<sup>33)</sup>では、依然として使用しているほど権威ある分類法であることは、識者周知の事実である。

それというのも、京都大学在任中であった倉田教授のいわれる“学術思想の分類であるとともに、容積をもつ書籍の分類”<sup>(書籍の分類)</sup>には、最適とされるからであろう。

にもかかわらず、これほどの由緒ある四部法が、黄金の統一分類法たり得ないのは、ほかならぬ、おもに欧米から資本主義が来襲したことに伴って起こった、図書館界を沸かせた混迷ぶりのためであるといってもよい。

加えて、有史以来、かつて経験したことのないう中華人民共和国が成立すると、中国全土が社会主義革命へと進入していった。この驚天動地の解放劇場裡における悲喜劇では、とても旧来の分類法をもってしては適応しないばかりか、積極的に競って鳴り物入りで、新イデオロギーを高らかに掲げて、迎合した分類法を捻出しなければならぬ世相であった。

いまここでわれわれは、最後をしめくくるに当たって、附言しておかなければならないことがある。というのは、新中国における分類法上の問題で、現に狙上<sup>きりあげ</sup>にあがっているいくつかを、中国図書館学会の大立者である楊威理先生の談話<sup>34)</sup>をも参酌しながら、意のあるところを手みじかに列挙してみたい。

- ① 解放後の分類表には、例外なく、マルクス主義を第一類に置いているが、もともと哲学と経済学と、社会主義の3部分より成っているところから考えれば、不合理である。
- ② 類目にマルクス主義と命名しても、そのなかに入れた、たとえばマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンなどの伝記のばあいには、別人の回想録が入っていることもある。してみると異った著者が、べつの立場から書いた双伝までも、同じその類目にはめ込むのは、理にかなわない。

- ③ マルクス主義の解釈書のばあいもしくりで、べつの観点から書かれた非マルクス主義的解釈書までも、同類に入れるのはおかしい。
- ④ マルクス主義の理論は、レーニンや毛沢東らだけが創造したものではなくして、劉少奇や周恩来、朱徳、その他の外人までもが寄与しているにかかわらず、べつべつの類目に入れるのも、腑におちない。
- ⑤ イデオロギーの相違によって、べつの類目に分類することは、合点がいかない。上述した拙稿の『山東法』で例示したように、同じ教育学を、新民主主義、社会主義、資本主義と分けたり、政治学をマルクス・レーニン主義と資本主義に分けるのは、それである。
- ⑥ 林彪や江青の著作は、当初はマルクス主義に入れておいたのに、追放後は反革命分子であることを考えれば、科学性、公共性を強調したい分類担当者に、政治性、階級性を附与するのは、分類理論に反する。
- ⑦ 社会科学と自然科学を倒置すべきであり、またローマ字を廃止して、数字のみで分類記号を与えるべきである、という論者もみられる。

以上のような意見が澎湃<sup>はげ</sup>として横行している、昨今の輿論<sup>いんろん</sup>が、かまびすしく聞こえてくる。

われわれはつね日ごろ図書の分類に携わるとき、さいわいに準拠すべき分類表は、天下公認のNDCであって、なんらためらうところはない。

なのに神経をすりへらすのは、たとえば、どこへあてがったらよかろうと、多者択一<sup>たしやくいち</sup>を迫られたときである。

むしろこの点、分類表を編集してきた多数の中国人学者自身が、異口同音に、“削足適履”のたとえを挙げて、この大国の国民性そのままに、分類の困難さは没法子<sup>むはふし</sup>（しかたがない）であると、あきらめの心情を吐露している<sup>35)</sup>ところに、むしろ興味と好感がそそられる。

大詰めを迎えたいま、ひとこと付け加えてむ

すびとしたい。すなわち、いみじくもくだんの楊先生は、さきの談話のなかで、“日本ではちょっと考えられない問題であるが……これまでも自作の分類法こそが最良であって、他は不良である”という観念がはびこっているため、とても分類法の標準化、統一化、一本化は、近い将来も実現されることはないであろうと概嘆されている。それにつけても、さきにも掲げてきたさまざまな意見や、異議にもとづく確執の悲劇性は、今後ともあくまでつづいてゆくことであろう。

〔松見後記〕拙稿を執筆するに当たっては、もともとかねてから、長らく収集してきた関係資料に加えて、さいわいにも6年前、本学の好意によって中国へ派遣され、各大学等を歴訪する機会に恵まれた。

それが契機ともなっていて、面識のある武漢大学図書館学部の黄宗忠部長、陳光祚教授、中山大学の連珍館長をはじめ、このたび高著『中国書物物語』を翻訳、出版（創林社）させていただいた北京大学図書館学部の鄭如斯助教授（女史）や、湖北省図書館の孫式礼前館長らから、じつになまなましい、かずかずの資料、コピーおよび書簡を、そのうえ温かい励ましをも拝受してきた。

については、関係事項をばわたくしが翻訳し、一方では自宅研修をむねとしつつ、児玉、山内ともども、こつこつと、筋書きに沿って、各論的、総論的に討議、調整を重ねながら、どうにか草稿し終えた。

おもえば、中国の同志たちからも、はかり知れぬほど、心のこもった友情をたまわってきた。ここにおいて末筆であるが、筆者ら一同、海を隔てて深く謝意を表するとともに、他方では、おおかたのご批判と、ご指教を仰ぎたい。

#### 注

- 1) 松見：『東洋における西欧目録法の撰取一喬衍瑄と藍乾章の見解について』日本図書館学会年報 Vol. 20 No. 2 (1973) pp. 57-65
- 2) 喬衍瑄：『論書名項和著者項在書目裡の地位』台湾学生書局 慶祝蔣慰堂先生七十榮慶論文集 (1968) pp. 389-402

- 3) ①張葆箴：『中国図書館運動』上海文華図書館学専科学季刊 Vol. 4 No. 2 (1932) pp. 119-137  
②松見：『中国図書館の搖籃時代』日本図書館研究会 図書館界 Vol. 6 No. 5 (1954) pp. 145-50
- 4) 松見：『中国における図書館事業の萌芽と、秦漢皇帝の功科』東海女子短期大学紀要 第8号 (1982) p. 87
- 5) ①松見：『向歆父子』松阪 風雅 復刊第7輯 (1953) p. 11-13  
②倉田淳之助：『四部分類の伝統』文部省主催漢籍担当職員講習会テキスト (1975) p. 1-32  
③倪曉建：『劉向、劉歆与別録、七略』武漢大学図書館学部 図書館情報知識 (1980) No. 1 pp. 50-52  
④井坂清信：『中国における図書分類法一二劉より「隋志」まで一』参考書誌研究 No. 17 (1979) pp. 12-34
- 6) 蔣元卿：『校讎学史』台湾商務印書館 (1969) pp. 5-11 には、校訂に必要な事項として、14件を数えている。つまり誤字、脱字、衍文、置字、重文、闕字、偏旁、錯簡、顛倒、混淆、妄加、妄刪、誤改、誤読が、それである。
- 7) ①杜定友著 松見訳：『図書分類法史略』図書館界 Vnl. 10 No. 3 (1958) pp. 87-88  
②倪曉建：前掲 注5) ③ p. 50  
③白国応：『図書分類学』北京書目文献出版社 (1981) p. 82
- 8) 羅本（字は貫中）の著。晋の陳寿の『三国史』にもとづいて、魏、呉、蜀の、三国興亡の歴史を小説化したもの。中国小説の四大奇書のうちに数えられるが、まさしく劇的にえがかれていて、文学的価値を高めた傑作。
- 9) 白国応：前掲 注7) ③ p. 84
- 10) LC やカリフォルニア大学、コロンビア大学等、多くの漢籍を所蔵している図書館。いずれも、中国人の図書館専門家が中心に、整備に当たっているありさまである。
- 11) 盧震京：『図書館学大辞典』台湾商務印書館 (1971) p. 360
- 12) 白国応：前掲 注7) ③ p. 87
- 13) 白国応：前掲 注7) ③ p. 88
- 14) 張恩龍：『明清兩代來華外人考略』中華図書館協会 図書館学季刊 Vol. 5 No. 1 (1931) p. 83-104 によると、当時來華した代表的外人84名を掲げ、各人の概要を紹介している。英国人の20名を筆頭に、ロシア、アメリカの順で、13か

- 国におよぶ。このアルブケルケ (A De Abbuque Que) の中国名は亜伯寛基, 3行にわたって解説をほどこす。
- 15) ①鄭鶴聲, 鶴春: 『中国文献学概要』上海商務印書館 (1939) pp. 141-172 には, 前述の利瑪竇はじめ, 26名の代表的な外人の翻訳書を紹介している。訳書の最多は, やはり湯若望の, なんと25種が見受けられる。
- ②なお, 当時における出版状況については, つぎの拙訳本に詳しい。
- 劉国鈞著 松見訳: 『図書の歴史と中国』増訂版 理想社 (1980) pp. 144-201
- 16) ①たとえば, ニューヨークの州立図書館学校へは裘開明, 沈祖榮, 李小縁, 袁同礼, 洪有豊, 戴志騫, コロンビア図書館学院へは, 桂質柏, 嚴文郁, 俞爽迷, 田洪都, ウィスコンシン大学へは劉国鈞, ハーバード大学へは徐家麟, フィリピン大学へは杜定友, 林語堂, オックスフォード大学へは向達ら, 著名な遊学者は多い。これらの帰国者による影響力については, つぎに詳解している。
- ②松見: 『日中図書館界の虹 (にじ)』東海地区大学図書館協議会誌 No. 18 (1973) pp. 6-11
- ③松見 井上 兎玉: 『間宮不二雄大人と, 中国図書館人との交流』短期大学図書館研究 No. 4 (1983) pp. 1-12
- 17) DC; Melvil Dewey, 1851-1931 編: “Decimal Classification. 初版 1878. 米”. EC; Charles Ammi Cutter, 1837-1903 編: “Expansive Classification. 1891-1911. 米”. LC; “Library of Congress Classification. 1901-. 米”. ALA; “American Library Association. 1876-. 米”. 後述の SC; James Duff Brown, 1862-1914 編 “Subject Classification. 初版 1906. 英”。
- 18) 松見 井上 兎玉: 前掲 注16) ③ p. 3
- 19) Mills, J.: “A Modern outline of library classification. Lond., Chapman & Hall, 1960. p. 58. その日本版: 山田常雄訳: 『現代図書館分類法概論』紀伊国屋書店 (1982) pp. 58-59
- 20) 朱家治: 『杜威及其十進分類法』前掲 図書館学季刊 Vol. 1 No. 2 (1926) pp. 265-308
- 21) 蔣復璁: 『杜威十分法之輸入』前掲 図書館学季刊 Vol. 3 No. 1, 2 (1929) pp. 37-42
- 22) 李玉麟: 『杜威図書館分類表創稿』山東省立図書館季刊 Vol. 1 No. 1 (1931) pp. 1-56
- 23) 洪有豊: 『克特及其展開分類法』前掲 図書館学季刊 Vol. 1 No. 3 (1926) pp. 423-434
- 24) ①姚名達: 『中国目録学史』長沙商務印書館 (1938) pp. 163-166
- ②昌彼得: 『改革中国図書館分類芻議』台北書目季刊社 Bibliography Quarterly. Vol. 2 No. 2 (1969) p. 3-11
- ③劉国鈞遺稿: 『中国図書館分類法的発展』中国図書館学会 図書館学通訊 (1981) No. 2 pp. 46-59
- 25) 劉法は, 国立北京図書館や, 故宫博物院といった大型公共図書館をはじめ, 南開大学, 輔仁大学等で採用され, 杜法はまた, 伝統ある広東省立, 福建省立, 湖北省立恩施図書館, 上海鴻英図書館や, 南昌大学図書館等で採用されている。
- さらに皮法は, 自身の北京大学をはじめ, 重慶大学, 北洋大学や, 上海市立図書館で, 王法は, 北京中央美術学院, 迪化新疆学院の図書館や, 陝西省立, 浙江省立, 青島市立等で, それぞれ適用しているが, まことにそのすさまじさが推察されてならない。
- 26) 松見: 『王雲五編: 中外図書館統一分類法の構成と展開』前掲 図書館界 Vol. 21 No. 1 (1969) p. 8-18
- 27) 劉国鈞: 前掲 注24) ③ p. 48
- 28) 劉国鈞: 『現在中国図書館図書館分類法情況簡述』前掲 注23) 附録 pp. 54-58
- 29) 前年5月に, 中共中央委員会を代表して, 陸定一が提唱したスローガンで, “すべての学者はきそって意見を發表し, もろもろの花がこぞって咲きほこるように, 中国の新しい文芸, 美術を創造發展させ”, そうした自主的思考, 自由討論の基盤に立って, “階級性のない科学の振興に努力”しなければならぬことを鼓吹したものである。この政策は, すべての面に, 新しい機構の確立となって反映された。
- 30) たとえば, “戈壁舟著『延安詩抄』の統一書号は, 10074·171”, “中国歴史博物館編『簡明中国歴史図冊』の統一書号は, 8073·30285” が与えられているように。
- 31) 松見: 『中国図書館統一分類法の成立』前掲 図書館界 Vol. 10 No. 6 (1959) pp. 167-174
- ときにこのレポートは, 当時ただちに入手した『中小型表』1957年版を底本にして執筆したのであるが, それからあと, 武漢大学の図書館学部・黄宗忠部長に, 分類法に関するさまざまな資料の提供を申し入れておいたところ, 初版発刊以来, 30年を経た数年前, 同じ印刷物の1966年版で, しかも同大学図書館の受入本を除籍の手続きをしてまで, 贈本してくれられた。異国の, うる

わしい友情を秘めた因縁の図書を私蔵している。

(松見記)

- 32) 最新の情報(1984年6月13日付け書簡)“全国公共図書館使用分類法統計”によると、この『中図法』は215館;80.5%,『中小型表』は20館;7.5%,『中小型館試用本』は18館;6.8%,『科院法』は4館;1.5%,その他の分類法は10館;3.7%となっている。
- 33) たとえば、東京大学および京都大学の東洋(京大は東方,現人文科学)文化研究所や、静嘉堂文庫および尊経閣文庫では、四部に加えて叢書部(尊経閣では雑部)を設けているほか、さらに東大のばあいは、新学部を、京大は、近人雑著部を加えている。
- 34) 楊威理:『中国図書館事情』のタイトルで、1980年10月20日、JLAにて、日本語によっておこなわれた講演より。国立大学図書館協議会編:『大学図書館研究』No.8(1981)pp.1-8所載。  
ちなみに楊図書館長(北京中央編訳局)は、日本の旧制二高卒、東北帝大医学部中退、北京大学経済学部卒、現中国図書館学会常務理事、北京市図書館学会理事長。
- 35) 松見:『図書分類法の宿命—「削足適履」のおしえ』前掲 図書館界 Vol.28 No.4(1976)pp.172-174。足を削って、履物に合わせるのたとえ。『淮南子(なんべい)・説林(せいいん)訓』にうたわれている名言で、ことの本末をあやまる、ごつごう主義をなじった故事である。